



卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第44期生の皆さん、口腔生命福祉学科第7期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。新潟大学歯学部でかけがえのない学生生活、青春時代を過ごし、本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、今日の日を一日千秋の思いで待ち焦がれていた保護者、ご家族の皆様のご尽力にも敬意を表するとともに、お喜び申し上げます。

卒業生の皆さんは、新潟大学歯学部の教育課程をすべて修了し、本日、学士の称号を与えられ、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれるわけですが、各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

我が国は世界でも例を見ない超高齢社会となり、また少子化の進行に伴い人口減少が加速している中、健康立国・健康長寿社会を実現することが国家政策の大きな課題となっています。健康長寿社会を実現するためには、生涯を通して正常な口腔機能の維持、口腔疾患と全身疾患の関わりに関する高度化、超高齢社会に対応した歯科医療等への対応が必要とされ、歯学科卒業生の皆さんには、歯科医療ニーズが変化する中で、口腔疾患と全身疾患の関連する領域を担うことができる専門医療職業人としてのスキル、口腔生命福祉学科卒業生の皆さんには、専門性に裏付けられたチーム医療推進のための実践能力及び地域医療連携業務に精通し、実践できる能力が求められています。私ども新潟大学歯学部の教職員は教育目標である

「口腔や食べることの視点から、包括的な医療人を養成し、社会に貢献できる人材の提供」を目指し、皆さんにこれからの超高齢社会の中で活躍できる基盤的知識、技能、態度を教育してきたと確信しています。皆さんは今日「口腔の健康を守るプロ」の一員となりました。しかしながら、皆さんが大学教育で学んできた知識・技能・態度はまだ必要最低限のもので、いわば皆さんは、今日また新たなスタートラインに立ったばかりです。社会は口腔保健・医療・福祉のプロとなる皆さんに対して幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求めています。また、社会は皆さんに専門的知識やスキルを維持・向上させる責任を求めます。このため、専門的職業人は「常に内省し、倫理的に行動する」ことが求められています。すなわち、常に自分を振り返ることにより、皆さんのスキル、そして人間性は向上していきます。これからの皆さんの努力により社会から始めてプロフェッショナルと認められ、社会から期待されるとともに、自分たちが仕える相手、その職業、そして社会に対して責任を追うこととなります。そのため、皆さんにはさらに一層の常日頃の精進が不可欠となります。皆さんが社会からプロフェッションと認められるために、今日の卒業式の日、これからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめながら、プロとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。このことは現在の競争社会で生き抜いていくために必要不可欠なことです。

今から10年前の平成16年4月に国立大学は国立

大学法人となり、私ども新潟大学歯学部は競争的環境にさらされることとなり、対学内、対学外、対世界との競争に打ち勝つために努力を続けています。昨年11月に国立大学改革プランが発表され、全国立大学の使命、すなわちミッションを再度定義することとなり、新潟大学歯学部も文部科学省との折衝を行い、平成28年度から始まる第3期中期目標期間に向けた改革を行い、さらなる発展を促し、持続的な競争力を持ち、高い付加価値を生み出すことが求められています。ミッションの再定義には個人の成果いわゆる自己満足的、主観的な評価ではなく、新潟大学歯学部の数値データに基づく第三者的、すなわち客観的評価が問われま

した。私ども新潟大学歯学部の教員も卒業生の皆さんと同様、社会からの期待に応えうるべき、さらなる高みを求め続けるつもりです。

皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部は競争が激化している歯科界の中で、高い評価を受けています。我々教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部は来年創立50周年を迎え、さらなる50年に向けた歯学部の将来は皆さんの努力にかかっていると云っても過言ではありません。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、今後の活躍を大いに期待しています。





歯学部卒業おめでとうございます

医歯学総合病院副院長 興地隆史
(歯科担当)

歯学科第44期生ならびに口腔生命福祉学科第7期生の皆さん、この度のご卒業誠におめでとうございます。皆さんは今、新たな人生の舞台への旅立ちを目前にして、将来への夢や希望と緊張感に包まれておられることと思います。無事この日を迎えられたことをご喜び申し上げますとともに、新潟大学歯学部で培った知識や技術を礎として、新しい環境の中で夢と目標に向かってポジティブ思考で邁進されますことを心より期待致しております。

皆さんには歯科医学や歯科医療、さらには社会福祉、口腔保健のプロフェッショナルとして、国民のQOLの維持・増進に貢献するという大きい共通の目標があるかと思えます。ところがその実現のために皆さんが学ぶべきことは、日進月歩の歯科医学や歯科医療の中で、まさに無限といっても過言ではありません。もちろん、新潟大学歯学部の教育カリキュラムは、臨床実習やPBLなど、自ら情報を収集し整理して習得する力を養うことを重視したものでありますので、皆さんには長い生涯学習の道程に必要な基礎的能力がすでに備わっているはずで、さらに、皆さんには若さ＝豊富な吸収力が備えられています。是非とも「今」を大切に考え、また今＝初心を忘れることなく、高度職業人として羽ばたくための基礎となる多くの力を速やかに蓄えて頂けることを期待しています。

一方、歯科医療を取り巻く環境は、今なお決し

て順風満帆とは言えません。向かい風に抗する局面に耐える力が必要な時代ととらえることも可能でしょう。けれども、歯科医療の可能性はまだまだ広がっていくものと信じています。例えば近年では多職種連携が医療界のキーワードの一つとなっており、周術期口腔管理や摂食嚥下リハビリテーションなど、さまざまな他職種との連携のもと歯科の特殊性を発揮する場が広がりを見せています。また、さまざまな歯科疾患と全身との関連が注目されていることも周知の通りです。さらには、高齢社会での「健康長寿」における歯を残すこと、食べることの多大な意義も社会の中で益々認識の度合いが高まっています。皆さんには多くの活躍の場が用意されていることは疑いありません。

そうは言っても、今後は皆さんには、お互い同じレールを進むことで事足りた学生時代とは大きく異なり、一人一人が歯科医療のプロフェッショナルとして独自の道りを歩むことが求められます。ピンポイントの専門分野を極めることから広くさまざまな領域を手掛けながら自分の得意とするものを磨くことまで、その方向性はさまざまと思いますが、いずれにしても他者にはない独自性を見いだすことで、はじめて「できる人」として認められることになろうかと思えます。その端緒となるこれからの貴重な数年間は是非とも有意義なものとし、活躍の場を見いだして頂けることを願っています。

卒業にあたり

歯学科6年 赤石美希

6年前、大学入試合格というゴールテープを切った私は、6年間という大学生生活をスタートさせた。そして今、その学生生活のゴールラインを踏み越えようとしている。6年間は長いようで短いようで、けれど重ねてきた時間や思い出を振り返るとやはり長かったのだろう。それ程に6年間という月日は私に多大な影響を与えた。1年目のクラスメイトとの出会いを始まりに、2年目で旭町の生活に足を踏み入れ、3年目には解剖実習にのめり込んだ。4年目にして模型実習が本格化し、5年目といえばタイへの短期留学と登院という大きな経験を手にした。そして6年が過ぎ、卒業を目前に控えている。

これまでの大学生活で最も印象深かったことを挙げれば、それはやはり臨床実習だろう。患者様を担当させて頂き、多くを学ばせて頂いた。患者様に先生と呼ばれる度に恐縮し、こちらが感謝する立場であるにもかかわらずありがとうございますと言って頂く度に、もっと頑張らなければいけないと身の引き締まる思いだった。私が歯科医師を本当の意味で志すようになったのも、実はこの頃である。元々医学部志望だった私は、4年生頃までは医学部再受験を考えていた。その私を歯科に向かわせてくれたのが、この手で治療させてくださった患者様方の存在だった。痛みをとってあげたい、治してあげたい、良い補綴物をつくりたい、そういった想いの膨らみが、私の中の迷いを萎ませていったのだ。貴重な1年間だった。慣れとは怖いもので、登院して半年経つ頃にはなんで



もできる気になっていた。1年も経つと、登院当初に比べ知識が増え診療経験を重ね、結果、自分にはまだまだ何も足りていないことを痛感した。それが成長だと思えばそうかもしれないが、巢立つどころか、雛どころか、まだ歯科という世界に卵の殻から頭を覗かせたに過ぎないのだ。

岐路に立たされている今。1年後には、就職というまた新たな道を模索せねばならない。その先に進むべく、道を選択し成長していかなければいけない。ゴールは常にスタート地点である。卒業して一息ついたとき、果たしてそれは終わりを迎えた瞬間だろうか。いや、大学入学の先に、臨床実習の先に、国家試験の先に、卒業の先に、目の前には常に新たなスタート地点がある。6年という時間を共に過ごした44期生の皆には、楽しかった思い出と出会ってくれたことに感謝したい。同期の仲間という存在は、これから先も支えになると予見している。各々が各々の困難に遭遇し、迷い挫折そうになることもきっとあるけれど、そんなとき私は思い出すのだろう。2014年3月24日44期生の卒業が、同じ私たちのスタートラインであることを。

最後になりますが、この6年間で関わってくださった先生方、ご心配ご迷惑をおかけしたことも多々あったことと思いますが、ご指導ご鞭撻頂きましたおかげで学生生活を何ん自由なく送ることができました。本当にありがとうございました。

卒業にあたり

歯学科6年 奈良圭介

新潟大学歯学部在籍した6年間は、今振り返ると短かったような、長かったような、どちらともいえない不思議な時間でした。しかし、細かいことを思い出せばそれこそきりがなく、密度の濃い6年間であったことは確かです。例えば、忘れもしない1年の運動会の帰り、原付で転んで足を骨折するという華々しい大学デビューをして、両親に半端でない心配をかけ、入学後間もない同級生に「松葉杖の人」という親しみのある愛称で認識されたのは今となってはいい思い出です。その



後、テストやカービング、模型実習などをこなしながら学年が上がっていき、ついに臨床実習が開始した時には、不安と、等量のワクワク感を感じていました。

私たちの学年は幸か不幸か「50年に一度の外来移転」と「臨床実習」が重なり、引き継ぎ時に先輩方に教えていただいた総診のシステムや道具の場所などの情報が、引き継ぎ終了後しばらくして白紙になる一方、新品のユニットやできたばかりの外来を初めて使用できるという、まさに「ラッキーかアンラッキーか、どちらにとらえるか自分次第」な学年でした。しかし、同級生みんなで協力して係を回していき、従来のやり方を柔軟に変えていきながら、先生方とも協力し、臨床実習がなるべく円滑に進むように環境を整備していく体験ができたのは、まさに「50年に一度のラッキーな学年」だったと思います。

臨床実習で経験できたことは非常に多く、先生方には歯科治療に関することから、患者様に対する配慮、歯科医師としての心構えなど、とても多くのことを教えていただきました。なかでも強く記憶に残っているのは、新患配当された患者様の治療計画を立案し、治療を進めていったことです。たくさんの先生方にお話を聞いて、治療計画を立て、ライター先生や患者様にもたくさん協力していただきながら治療を進めていきました。大変なこともたくさんありましたが、最後の診療の時、患者様に「大きな口で笑えるようになったよ。ありがとう先生。」と言っていた時にはうれしくて泣きそうになったのを鮮明に覚えています。このような充実した臨床実習を行えたのは、患者様の新潟大学歯学部での教育へのご理解とご協力、実習体制を整えてくださった先生方の支援、

毎日診療に付き添いサポートしてくださったライターの先生方、6年間励ましあって一緒に卒業を迎えた仲間、そして家族の支援。多くの方々の温かいご支援・協力のもとに非常に充実した大学生生活を過ごしてこられたのだと感じています。

最後に、6年間見守っていただいた先生方、ありがとうございました。6年間一緒に大学生生活を過ごした同級生のみんな、みんなと一緒に6年間頑張れて本当にうれしいです。そして、心配ばかりかけてしまっているお父さんお母さん、大人になったようでまだまだ世間知らずの子供ですが、何とか卒業することができました。ありがとうございました。今後は歯学部で学んだことを生かして、立派な歯科医師になれるよう精進していきたいと思います。

卒業にあたって

口腔生命福祉学科4年 木根 洸 あ や

新潟大学に入学して早いもので4年が経とうとしています。時の流れの早さに驚いていますが、特に4年次はあっという間だったように感じます。そして「口腔生命福祉学科は学年が上がるとともに忙しくなる……」という入学当初に聞いた噂。この噂が学校生活を送っていくに連れ、本当だったんだと確信に変わった4年間でもありました。大学生活の4年間を振り返ると、楽しかったことや大変だったこと、いろいろありましたが、日々充実していたように思います。

4年次の臨床実習は、クラスみんなにとってまだ記憶に新しくかつ4年間の学校生活の中で1番印象に残っているのではないかと思います。本格的に病院実習が始まったのは、4年の4月でした。実習が始まった当初は、このまま最後までやっていけるのかと先が思いやられる毎日でしたが、その分無事に終わった時の達成感は何にも代えがたいものとなりました。

最初は右も左も分からず、常に不安を抱えた状態で臨んでいました。そして、毎日が学ぶことだらけで、机上で学んだことと臨床の現場での実践とのギャップに戸惑うことばかりでした。そんな

不甲斐無い私達に、忙しい合間を縫って快く教えて下さった診療室の先生方、そして歯科衛生士、看護師の皆さんには本当に感謝しています。役に立たない自分にもどかしさを感じながらも、多くのことを学んでいき、徐々に臨床に慣れていくことができました。そんな中、患者様あるいは先生方に「ありがとう」と声をかけて頂いた時は、こちらが感謝をしたくなる程嬉しかったし、それが励みになりました。

そして、この臨床実習と並行して、私は新潟県障害者交流センターにて福祉現場実習をさせて頂きました。施設の職員の方に指導の下で、実際の福祉の現場で利用者の方と接する貴重な経験をさせて頂きました。より多くの利用者の方とのふれあいを通して、対人援助の難しさややりがい、そして利用者1人ひとりの価値観やこれまでのライフステージ等の背景を考慮した上で支援を行うことの大切さ等、多くのことを学ぶことができました。

私達口腔生命福祉学科7期生は総勢21名。これまで卒業された先輩方と比較するとかなり少ない人数でしたが、みんなで助け合い励まし合いながら毎日を過ごしてきました。同じ立場だからこそ分かること、理解できることが多くありました。このクラスのみんなの支えが、何度私を救ってくれたかは計り知れません。みんなには本当に感謝しています。

原稿を書き始めた最初は、これまでの4年間について書こうと決めていたものの、読み返してみると、4年次の内容に偏ってしまいました。それ程、私の中では印象的かつ貴重な経験が詰まった1年になったのだと思います。

最後に、私に学ぶ機会を与え、成長させて下さった方々には本当に感謝しています。この4年間で経験して学んだことを活かして、今後も頑張っていきたいと思います。

卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 木村美緒

歯学部ニュースの執筆には絶対に関わらないだ

ろうと思って4年間を過ごしてきましたが、卒業を目前にして携わらせていただくこととなりました。執筆を依頼されてから、卒業に際して思うことを考えていました。文章を書くことも自分の気持ちを連ねることも得意ではありませんが、入学からこれまでの大学生活4年間のことを書かせていただきます。

まず歯学部への入学は、高校時代の私が心から目指したものではありませんでした。一言で言えば、家庭の事情というやつです。しかし、幸いにも合格通知をいただいてこちらに通うこととなり、少々の不満や不安を抱きながらも新たに始まる大学生活に期待を膨らませていたのも事実です。

1年次は歯科のことなどほとんど分からない状態で目まぐるしく過ぎ去っていきました。五十嵐キャンパスでの教養科目履修は、苦手な理系科目や社会系科目に悪戦苦闘しながらもギリギリで単位を取ったりと、慣れることに精一杯の一年でした。

2年次は歯科の専門科目やPBLなど新しいことがさらに増え、これまた戸惑いの多い年でした。そのことに面倒くさい気持ちになることもありましたが、歯科の知識が増えることや学生同士の相互実習が楽しいと感じていました。

3年次から始まる福祉のカリキュラムについて、「歯科なのに福祉をやるの?」と疑問が絶えませんでした。そして先にも述べていますが私は社会系科目が苦手なので、福祉に関する法や政治のことで頭がパンクするような思いでした。歯科では、幼稚園と中学校での集団保健指導や、保健所における1歳6ヶ月健診で個別保健指導をしたり、後期からは病院での臨床実習が少しずつ始まり患者様と直接関わる機会が増え、自身の勉強不足やコミュニケーション能力の無さを痛感することとなりました。

そして不安を抱えたまま迎えた4年次。臨床実習は、前期は緊張の連続で、できない自分が情けなくて涙が出ることもありました。しかしその分だけ学ぶことも多く、2年次から学んできたことを復習して臨床で生きる知識とし、医療に携わる者の一人としてその在り方を見つめ直すことがで

きたのではないかと感じています。そして、3年次から疑問でしかなかった福祉も、23日間に渡る社会福祉現場実習によって得られたものがあります。福祉の魅力を知り進路に迷いが増えたときに、実習先の担当職員の方が仰ってくださった「歯科の現場に福祉や障害者のことを解っている人がいてくれることはとてもありがたい」という言葉で、福祉で学んだことを歯科衛生士として活かしてい

けたらと思うようになりました。

不満から始まった大学生活でしたが、私の気持ちにも変化が生まれ、今では本当に良い4年間だと感じています。ご教授くださった先生方、日々を共にしたクラスメイト、心の支えだった部活の仲間、そして大学に通わせてくれた両親に深く感謝いたします。この恩を少しずつでも返せるように、これからもがんばっていきたいと思います。

